

賞味期限

子供達がたまに帰って来ると冷蔵庫がガラガラになる。賞味期限が切れたものを捨てて行くからである。女房は片付け魔できれいい好きのくせに、味や匂いには鈍感ときいてゐる。ただ、邪悪なものを追い出す力はあるので、多少腐ったものでもびくともしない。アレルギーは全くなく、病原微生物にやられることも先ずない。わたしも随分鍛えられたが、身の危険を感じるので匂いだけは敏感になっている。賞味期限や消費期限などないころは、だれもが、色や匂い、あるいは一口口に入れて食品の腐り具合を判断したものだ。賞味期間の表示は、昭和51年の即席めん類に溯るといふ。そのころからあらゆる面で官主導がはびこり、自己

責任の概念が薄れて行ったのだろう。

加工食品の企業家のなかには、「もったいない」精神から賞味期限に切歯扼腕している社長もいるかもしれない。デパートの地下食品売り場が一日を終えると、膨大な量の食品が捨てられる。これを見れば、「もったいない」だけでなく、飢餓に苦しむ世界の難民に申し訳ないという気持ちを抱く社長もいるはずである。

わたしは製造年月日だけを正直に表示すればよいと思う。あとは自己責任に任せればよい。何でも人のせいにする風潮が蔓延すると、いよいよ官の規制が多くなり、天下り先が増えるのは必然である。少しは野生の感覚を取り戻さないと、人間まで腐ってしまうような気がする。

いづれ賞味期限という言葉は食品業界からは消えるだろう。ただ言葉そのものはなかなか乙なので、いつまでも残るに違いない。恋愛の賞味期限、アイドルの賞味期限、技能の賞味期限などなど。還暦を過ぎると、医療技術者としての自分の賞味期限も切れ始めているのではないかと感じることがある。30代は深く切り込むがまだ青臭く、40代は広くコモンセンスを身につけるがまだ円熟しておらず、50代でようやく質量ともにバランスが取れたと思つたら、まだポケの60代に突入して、鬆(す)が入り始めた。患者も原始感覚を取り戻すと、肩書では騙されず医者賞味期限

10007

が分かるようになるだろう。それが分からない場合は「先生の製造年月日は？」と聞く人が現れるかもしれない。

右の随想を投函してから2、3日後、産経新聞の「産経抄」が、賞味期限や消費期限の表示は、五感の衰えにつながったと警鐘を鳴らしていた。世の中には同じように考える人もいるものだと思いつつ、少々がっかりした。随想にも製造年月日を記しておかないと、賞味期限が切れてしまう。